

提言

## 『坂の上の雲』の時代に何を学ぶか —激動の国際社会を生き抜くために—



渡辺 利夫 拓殖大学学長

わたなべ・としお 昭和14年山梨県生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業。同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授。東京工業大学教授を経て、現在、拓殖大学学長。外務省国際協力に関する有識者会議議長。第17期日本学术会議議員。アジア政経学会理事長(元)。主な著書に「成長のアジア・停滞のアジア」、「西太平洋の時代」、「神經症の時代」、「開発経済学」、「私のなかのアジア」、「新脱亜論」などがある。

緊迫する朝鮮半島情勢、異常な軍拡を続ける中国の動向。現在の極東アジアの地政学は、日清・日露両戦役の時代に酷似している。渡辺利夫拓殖大学学長は、「あの時代の強烈な危機意識と比べて、現在の日本外交の安穏は一体どうしたことでしょうか。日清戦争開戦前史にもう一度戻って、私どもは戦略を練り直さねばなりません」と指摘する。

「まことに小さな国が、開化期をむかえようとしている」――印象深い書き出しで始まる司馬遼太郎氏の歴史小説『坂の上の雲』。維新を経て近代国家へと躍進した明治期日本の実像と、四国松山を同郷とする秋山好古、真之の兄弟、正岡子規らが、激動の時代に生きる姿を描いた同小説は、日本の国民的文学と言つてもよいでしょう。

先の大戦の敗戦直後に小学校に入学した私は、およそ近代史といふものを系統的に教えられたことはありませんでした。しかし、その負の価値にたっぷりと色づけされた左翼史観を断片的に注入されたのみです。

しかし、そういう私でも、近現代史の中に何かしらのストー

リーセンスを得て、その過程で、司馬作品を何度も読んできたからなりでしょう。私は昨年、多少なりとも本格的に資料を収集して『新脱亜論』(文春新書)を上梓しました。その過程で、司馬文学の血肉化を改めて思い知られ、かかる傑出した国民作家に恵まれたことの幸せに思いを馳せました。

実は、現在の極東アジアの地政学は、日清・日露の両戦争が

戦われたあの頃に「先祖返り」したかのように酷似しています。

明治前期における日本の活路は一言で言つて福澤諭吉の「脱

亞論」に記された方向で展開されたのです。

朝鮮を愛し、その開国と近代化を求めてやまなかつた福澤は、

政争と内乱を繰り返して独立の

気概なき朝鮮、朝鮮を臣下とし

て服属させ、朝鮮の政争や内乱

の度に大軍を派遣して、その近

代化を阻止する清国を眺めて、

日本は、欧米の近代化に倣つて

富国強兵に乗り出すべしとする

激しい論陣を張りました。

福澤の脱亜論は、日清・日露

戦役開戦の十年も前のことであ

ったことを顧みれば、まことに

慧眼なるオビニオンリーダーで

あります。標的はどう考えても日本

が小村寿太郎です。

私は今回、改めて福澤、陸奥、

朝鮮が日本の支配下におかれ

てもなお、これに隣接する満州

の陸奥宗光でした。

小村の書き物を読んで深い感銘

を抑えられなかったのですが、

これは現在の極東アジア地政学

の危機的状況を考えながら、こ

れを読み進んだがゆえであった

にちがいにありません。

あつたと言わねばなりません。

「清韓宗属関係」と称される

清国と朝鮮との君臣関係を断ち

切らなければ朝鮮の独立はあり

えず、朝鮮はいずれ清国、次い

でロシアの支配の手に落ちる。

そうなれば日本は深刻な危険に

瀕すると自覚して日清戦争に挑

み、その戦争の全局を指導した

のが陸奥宗光でした。

小説の書き物を読んで深い感銘

を抑えられなかったのですが、

これが北朝鮮の「自殺行為」であ

るにしても、目を覆いたくなる

ような惨劇が日本のどこかで発

生することは避けられません。

それが北朝鮮の「自殺行為」であ

るにしても、目を覆いたくなる

ような惨劇が日本のどこかで発

生することは避けられません。

これが北朝鮮の「自殺行為」であ

